

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34311

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22730429

研究課題名（和文）多胎育児の脆弱性についての実証的研究：エンパワーメントの視点から

研究課題名（英文）An empirical study on the childcare-related problems of mothers with multiple childbirths

研究代表者

越智 祐子 (OCHI YUKO)

同志社女子大学・現代社会学部・助教

研究者番号：40455556

研究成果の概要（和文）：本研究では、ふたご等の育児（多胎育児）者が感じる育児困難について、当事者と協働で多胎育児支援を啓発する映像表現をおこなう過程を通して考察した。妊娠・出産・育児の暗黙の基準は単胎のものであり、多胎育児者は自分の感情や経験という「目の前の現実」とは合わないことにとまどい、不全感を抱いていた。本研究の成果は、映像作品および同作品を用いた専門職向け研修プログラムとして、広く一般に提供される。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to visualize the subjective difficulties related to childcare faced by mothers with multiple births, through discussion with a member of a peer support group, to shed light on the childcare support needed by such mothers. The results revealed that specific guidelines for care during pregnancy, childbirth, and child-rearing are available only for single births. Therefore, mothers of twins are upset by the gap between these standards and reality, and consequently suffer from a sense of inadequacy. The results of the study can be used to develop professional training programs intended for the general public.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：多胎育児支援 マイノリティ エンパワーメント

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 子育て家庭を取り巻く環境

1990年、日本はいわゆる「1.57ショック」を経験し、少子傾向は、深刻な課題として、広く一般に認知された。一方で、生殖医療技術の進展に伴って多胎出産は増加し、現在では、およそ100の出産に1の割合でふたごが誕生しているとされる。日本社会には、少数ながらも一定程度の多胎児と多胎育児家庭

が存在しているのだ。

政府はさまざまな子育て支援策を展開しているが、乳幼児を育てることに負担感を感じる母親は少なくない。地域社会や家族機能の変化により、親子は社会的に孤立しがちだとも言われてきた。そこで行政やNPO、当事者は地域で親子が集まることのできるひろばを設置したり、育児サークルを運営するなどしてきた。しかしこれまで、1度の出産

で2人以上の子育てを同時におこなうことになる多胎育児に関しては、その特徴や支援のあり方について改めて問われることはなかった。

## (2)多胎育児の困難感の社会学的考察の必要性

多胎妊娠・出産は、医学的にハイリスクだとみなされ、出産後は主として母子保健の観点からスクリーニングがおこなわれる。このとき問題となるのは子どもの心身の発達状態や母親の心身の健康状態である。例えば、子どもが低体重で生まれれば、その育児は難しいと判断される。逆に、心身状態に特別の問題がなければ、多胎だからという理由だけでは保健師の支援対象とはならない。このような医学的・保健的観点による多胎のリスク評価は「母」および「子」をそれぞれ身体単位で個別にとらえた評価だと言える。

しかし現実には多胎育児では、乳児期の外出がきわめて困難で、家庭の中で母子が孤立しがちであることが指摘されている。多胎育児者の多くは、ふたご（以上）を育てることの困難感や孤立感を抱いているのである。これらの困難感や孤立感は、当事者たちによって「うまく説明できないが、なにかが違う」「単胎育児者には言えないことがある」と語られるものであり、心身や経済の負担の把握にとどまらず、親子の関係や周囲との関係からも多胎育児の特徴を把握する必要性を示唆している。社会学的な観点からの多胎育児の検討が必要なのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、多胎育児の困難さのうち、社会関係に関わるものについて、その内容と機制を考察する。

基本的には主たる多胎育児担当者である母親の主観的な負担感について検討するが、あわせてパートナーである父親へも調査を実施する。多胎育児では単胎育児の場合と比較して、父親の育児参加の度合いが高いと言われる。どのようにして、父親たちの育児参加は成り立っているのだろうか。この調査により、母子に対する父親の主観および、育児参加について考慮できるようになる。

本研究は、学術的な成果にとどまらず、多胎育児当事者のエンパワーメントを目指し、自己表現を支援するという実践的な目的を持つ。このため、子どもが就園・就学時期を迎え、心身の負担感が一段落した当事者たちが、より年少の子どもを持つ多胎育児者を支援するピアサポートグループに協力依頼し、研究を実施する。

## 3. 研究の方法

### (1)母親グループについての質的調査

未就園児の母親たちが集まる多胎育児サークルで、参与観察を実施する。この結果を踏まえて、既の実施済みのインタビュー調査の結果の再分析をおこなう。

さらに、子どもが就園・就学した母親たちで構成する多胎育児のピアサポートグループと協働し、多胎育児の困難感について検討をおこなう。具体的には、インタビュー調査の分析結果を研究代表者がグループに提示し応答を得、さらにグループメンバーの体験について言語化を促す。

### (2)父親の育児参加についての調査

近年「イクメン」と呼ばれる、育児楽しんで参加する男性が注目され、政府主導でプロジェクトも展開されている。一方、多胎育児家庭では、「イクメン」が注目される以前から、父親が積極的に育児参加していると言われていた。そこで本研究では、多胎育児における父親の育児参加が、どのようにしておこなわれているのかを探る。このため、多胎育児の父親支援講座の参加者を対象として、質問紙およびインタビュー調査を実施する。

### (3)映像作品の製作

多胎育児のピアサポートグループと協働して、多胎育児中の体験の映像表現を試みる。これまで「うまく言えない」として、言語で説明されてこなかった事柄について、映像を用いて表現する方法を探る。この作品自体は、育児支援に関わる専門職に多胎育児の特徴について啓発し、支援を要請する目的を持っている。このため、最終的には完成した映像を用いた研修を企画し、ピアグループの当事者と協働で実施することで、実践的な目的を達成する。

## 4. 研究成果

### (1)周囲の先入観がもたらす負担感

ピアサポートグループとともに、「多胎ならでは」の育児負担について、とくに社会との関係に起因する負担感に関する検討をおこなった結果を記述する。

多胎育児者は、外出時に見知らぬ人から呼び止められ、話しかけられる経験を多く持っている。典型的なことばは「似てる（似ていない）ね」「年子よりましよね」「いっぺんにすむから楽よね」といったものである。

これらのことばは必ずしも悪意から発せられるのではなく、単純にかわいいと感ずる発言や、むしろ励ましのことばであることも少なくない。それは十分理解されていたが、なお、多胎育児当事者にとってはなにか違う、時にはつらいと感じられるものになっていた。このずれの違いの要因はなんだろうか。

「似ている」「似ていない」という感想は、一見正反対の内容に見えるが、その前提には、

「ふたごはふたりで一組だ」という共通の先入観がある。ふたりを並べて比較している点では、同じことだと考えられる。同様に、「いっぺんにすむ」の前提は、「ふたりで一組なので同時だろう」というイメージだと考えられる。さらに言えば、一般に流通している乳幼児期の母子関係のイメージは、単胎のもの（母一人に対して子どもは一人）であることから、同一年齢の複数の子どもたちの場合もまとめて一組であると見なしがちであることが推測できる。

ところが、現実にはふたりはそれぞれ別の個性を持つユニークな存在である。このため、実際の育児場面では、月年齢が同じ子どもから、同時に同じケアを要求される難しさに加えて、タイミングや内容がずれる形での要求へも対応をせまられる難しさがある。周囲からの声かけでは、この事情を想像したうえでの発言はきわめて少ない。周囲の先入観と、当事者が体験している現実との相違が、多胎育児当事者には周囲の無理解と受け止められ、時に孤立感へつながっていたのである。

## (2) 父親の育児参加の構造

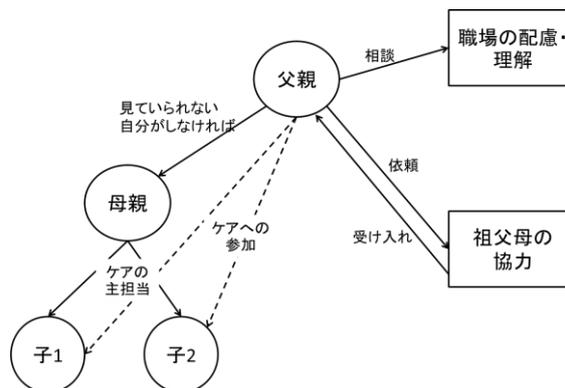
NPO 法人新座子育てネットワークが提供する、「ふたご・みつごのお父さん応援プログラム」の参加者へ協力を依頼し、自記式質問紙による調査を依頼した。調査期間は2011年11月～2013年2月である。さらに、可能な場合には後日インタビューに応じていただいた。

結果、単胎を対象とした先行研究の結果と同様に、育児参加を可能にするのは、相談しやすい職場の雰囲気であり、自分でどの程度仕事のコントロールができるかである。上司や同僚に、多胎育児中であり自分の参加が不可欠であることを説明することで、協力を引き出していた。一方、育児に関しては、自分の希望や規範意識から参加するというよりは、妻が過酷な子育てに直面している様子を見て、自分が関与しなければ妻が大変なことになる、という状況判断と、見て見ぬふりはできない、というやむにやまれぬ選択の余地のない状況で参加している様子がうかがえた。

「イメージしていた子育てと現実とはまったく違っていた」という発言もきかれ、父親の立場からの印象でも、確かに多胎育児者の主担当者の困難感が強いことがわかる。ただ、妻からの協力要請は必ずしもあるわけではない。父親たちは、自分の状況判断で育児参加を決定している。このことから、現実にもどの程度育児が困難であるかに加えて、父親が現実をどのように認識するかが、家庭での育児体制に大きな影響を与えることが示唆される。

まとめると、多胎児の父親は、子どもと自

分との関係からではなく、妻との関係から、子育てへの参加の度合いを決定している。父子関係には母の存在が介在しているのである。



## (3) 母子関係の構造的違い

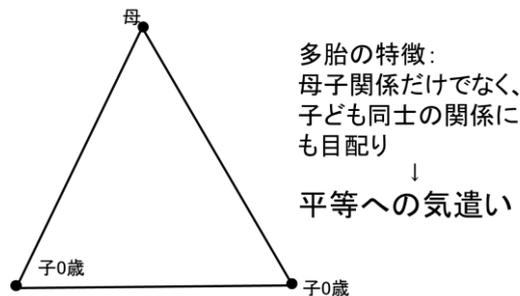
多胎育児中の母親たちは、多胎児を「平等に育てる」ことに苦心している。この苦心は「母一人に対して子どもは一人」ではない母子関係に関連すると考えられる。

そこで、日常のさまざまな場面での平等をめぐる苦心について、多胎育児のピアサポートグループメンバーから事例を募り、議論したところ、同一年齢の子どもたちの間で、即時の順序をつける必要が多く存在することがわかった。例えば、外出時にふたりが同時に、異なる方向へ走り出してしまった場合があてはまる。複数の子どもがいても、年齢の異なるきょうだいであるケースでは、年長児に言語による静止を与えつつ年幼兒を抱きとめる、あるいは、年長児に「危ないから手をつないであげて」と指示を出すことが可能である。しかし、多胎児は月年齢が同じ子どもたちなので、単胎育児者が常用している長幼の序を、子ども間の順序として使用することができない。このため、その場に即した判断基準を探し、適用することを迫られる。上記の場合であれば、判断基準は危険性の高さになる。車道など、より危険が高いと考えられる方向に走り出した子どもを優先させる。

日常のやりとりにおいては、逆に順序がつかないように、固定化しないようにバランスをとることに苦心している。具体的には母子の心理的距離感やケアの提供量などである。つまり、多胎育児における母子関係は、母一人に対して子どもは一人の2者の関係ではなく、3者以上の社会関係を構成する。これが、単胎育児の場合と多胎育児の場合との母子関係の構造的相違である。

多胎の母子関係については、2者関係が2対以上存在すると考えがちで、子ども同士の関係は看過されがちであるが、実は母親は、

子ども同士の関係に配慮している。順序が必要なときには最適の順序を探して適用し、日常的にはバランスが取れるよう行動しているのである。



(4)映像作品製作によるセルフアドボカシー  
多胎育児への理解と支援を得ることを目的として、多胎育児の特徴について映像表現をおこなった。すべての作業は、多胎育児のピアサポートグループとの協働により実施した。作成には、趣旨説明から完成試写まで2011年4月から2012年5月の期間を要した。

手法やテーマの選択、シナリオ作成等を、月に1度程度の会合で話し合いながら、協働でおこなった。手法は、日常生活の困難を表現したいという理由からドラマを選択し、外出の困難をテーマとすることにした。体験を持ち寄り、どのエピソードを採用すべきか、どのように表現すべきかの議論を重ねた。

製作過程でメンバーは、「自分たちが大変すぎたときには、それどころではなく、とても言えなかったこと」だと言い、「これまでうまく言えなかったことが、伝えようと組み立てることで整理できた」という実感を得ていた。研究代表者は、本研究を多胎育児者が自らの強みを活かすことができるようエンパワーするアクションリサーチとして設計したが、メンバーの立場から見ると、本研究への参加はセルフアドボカシーに他ならないことが、発言から読み取れる。

#### (5)啓発活動の成果

完成した映像作品を用いた研修プログラムを開発した。内容は、社会関係に起因する多胎育児の困難についての解説(30分)、映像作品の上映(15分)、グループディスカッション(45分)である。解説部分については研究代表者が組立をおこなったものを、グループのメンバーが話しやすいように自らアレンジしたものを作成した。

研修プログラムは、マスメディアの紹介やメンバーのロコミにより関心を持たれた組織や団体に提供された。プログラム実施のコーディネートや当日の役割は、研究代表者とグループのメンバーが分担した。

研修プログラムの主な提供先は、地方自治

体の母子保健担当者や、子育て支援団体である。受講者からはおおむね好評を得た。主な感想は、「これまで漠然と考えていた多胎育児について、具体的にイメージすることができた」「これほど大変だとは知らなかった」「何気ないことばが相手を傷つけうることや、逆にちょっとした気遣いが喜ばれることが改めて理解できた」「当事者から学ぶ必要を感じた」「明日からの支援活動に活用したい」等であり、一定の成果を得たと考えてよい。

研修の実施に伴う直接の効果は、受講者の認識や行動が変容することだが、副次的な効果として、ピアサポートグループのメンバーたちの自己イメージの変化を挙げることができる。研修を担当したメンバーたちは、保健師等の専門職に対して自らのことばで自分たちを説明する機会を得たと考えており、「日常とは異なるかたちで社会参加できた」「世界が広がった」と語っている。この経験を経て、ピアサポート活動はさらに充実することが期待できる。

#### (6)まとめ

本研究の結果、多胎育児は単に子どもの数の多い単胎育児ではないこと、両者には構造的・質的相違があることが示唆された。多胎育児、中でも乳幼児期の育児は身体的にも心理的にも過酷であるため、これまで当事者は自らの体験を語ってこなかった。本研究をとおして、多胎育児の当事者たちは自分たちの表現をおこなうきっかけを得た。このことは、専門職と当事者との関係の変化を今後予想させるものである。すなわち、ケアを提供する・されるという一方通行の関係ではなく、専門職が当事者から学ぶことができれば、母子保健や子育て支援の現場での多胎育児支援の質の向上が期待できる。

あわせて、育児や母子関係に関する先入観は、育児をスタートさせたばかりの多胎育児者に内面化されていることも示唆された。今後は、当事者同士の対話を促すことにより、多胎育児の負担感軽減に寄与することが必要だと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①越智祐子・横田恵子, 2011, 「多胎育児の社会的困難-母親へのインタビュー調査から」『神戸女学院大学論集』58(2): 65-78.

(<http://ci.nii.ac.jp/lognavi?name=nels&lang=jp&type=pdf&id=ART0009843499>)

〔学会発表〕(計1件)

①越智祐子「求められる多胎育児支援とは－  
養育者へのインタビューからの探索的検討－」  
日本社会福祉学会第58回秋季大会、2010  
年10月10日、日本福祉大学

〔その他〕

ホームページ等

(1)新聞掲載等

①読売新聞・朝刊・平成24年9月20日(木)  
「双子の育児 てんてこ舞い」

②神戸新聞・朝刊・平成24年9月9日(日)  
「双子の育児 こんなに大変」

③京都新聞・朝刊・平成24年5月28日(月)  
「双子育児こんなんです」

④読売テレビ「かんさい情報ネット ten.」  
内の動画にて紹介

[http://www.ytv.co.jp/ten/calendar/oaDetail.  
php?dateList=20121108](http://www.ytv.co.jp/ten/calendar/oaDetail.php?dateList=20121108)

(2)映像作品 (DVD)

「知っていますか ふたごの子育て～ふたご  
と過ごすホントの日常～」

6. 研究組織

(1)研究代表者

越智祐子 (OCHI YUKO)

同志社女子大学・現代社会学部・助教

研究者番号：40455556

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：